

日本語の否定極性表現（以下 NPI）は、Ono(2008)において不定語を含む句と不変化詞「も」を含む句が Major Phrase（以下 M 句）の中において隣接している時、不定語は NPI として解釈されると主張されていた。しかし、Ono(2008)の分析は「も」に隣接した不定語のみを認可するため、Kishimoto(2012)で示された「から」格主語の例や本発表で扱う与格主語、の例ではそれらの要素の間に目的語が介在するゆえにその状況において生起する不定語は NPI として認可できないという誤った予測をしてしまう。本発表では、Ono(2008)の NPI の認可には音韻的なものが関わっているというアイデアを踏まえた上で、M 句よりも一つ大きな範疇である Intonational Phrase（以下 I 句）を An(2007a,b)の分析法をベースに説明する。そして本発表では日本語 NPI の認可には音韻的な要請だけではなく統語的な要請も必要であると主張する。最後に与格主語と主格主語の NPI の認可を通して、日本語の NPI の分析に I 句を用いることは非常に大きな役割を果たすということを示す。

## 1.0 理論的枠組み

- ・本研究で用いる枠組み

An (2007a, b)の Intonational phrase（以下 I 句）分析

→（かつて）統語的な問題として捉えられてきたものを音韻部門における問題として捉え直し、韻律範疇 I 句(基本的に統語における節(CP)に対応する)を用いることによって文法性を明らかにする。

- (1) 独立した I 句を形成する要素  
Root clauses, parentheticals, appositives, tag questions, vocatives, preposed adverbials, certain moved elements, and focus element

♠ 日本語の否定極性表現（以下 NPI）の認可を例に An(2007a,b)の I 句分析が日本語においても適用できることを示す。

## 2.0 NPI として働く不定語

- ・不定語と不変化詞「も」からなる NPI は否定の環境において正しく解釈される。

- (2) a. 太郎が何も食べなかった。  
b. 太郎がどこへも行かなかった。  
c. 太郎が誰も愛さなかった。

- ・Kuroda (1965)でも観察されているように不定語と「も」は必ず隣接する必要はない。

- (3) a. 太郎が何を食べもしなかった。  
b. 太郎がどこへ行きもしなかった。  
c. 太郎が誰を愛しもしなかった。

- ・しかし不定語と「も」が否定の作用域(TP 内)にあるだけでは NPI として解釈され得ない。

- (4) a. 誰も泣かなかった。  
b. \*誰が泣きもしなかった。

\* 本発表における下線、マーカー、日本語訳などはすべて筆者によるものである。

→不定語と「も」の関係をつめる必要がある。

### 3.0 先行研究

#### 3.1 Ono (2008)

- ・数少ない音韻的な認可方法に焦点を当てた分析法。

(5)  $[_M \{p \text{ 不定語} \} \{p \text{ 「も」} \}]$

→Major Phrase (以下 M 句)の中で不定語を含む句と「も」を含む句が隣接している時、不定語は NPI として認可される。

(6) a. 太郎は何を読みもしなかった。  
b.  $[_M \{p \text{ 何を} \} \{p \text{ 読みも} \}]$

(7) 太郎がどこへ向かい/誰を誘いもしなかった。

→(6)も(7)も(5)の分析に従うため、NPI として解釈されと言える。

(8) a. \*誰が太郎を殴りもしなかった。  
b. \* $[_M \{p \text{ 誰が} \} \{p \text{ 太郎を} \}] [_M \{p \text{ 殴りも} \}]$   
c. \* $\{p \text{ 誰が} \} [_M \{p \text{ 太郎を} \} \{p \text{ 殴りも} \}]$

→主格主語の例において不定語は NPI として解釈できないということを説明することができる。

#### 3.2 Kishimoto (2001)

- ・統語的な分析法

(9) a. \*誰が笑いもしなかった。  
b. 太郎は何を買いもしなかった。  
c. 太郎はどこで走りもしなかった。

(Kishimoto 2001: 600)

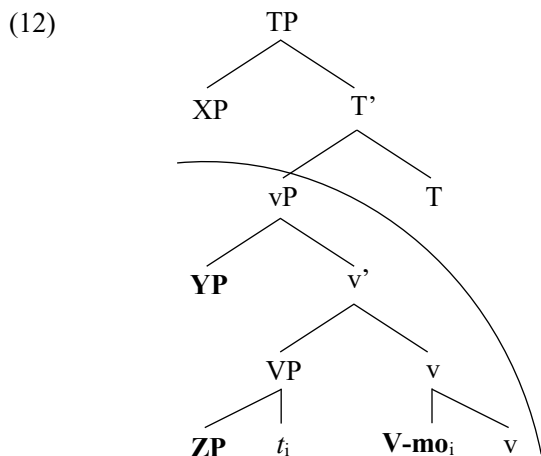
(10) ?\* 誰を太郎は寝めもしなかった。

(Ibid.: 605)

→動詞句内の「も」が認可できる範囲は  $vP$  内。

(11) Y is in the domain of a head X if it is contained in  $\text{Max}(X)$ , where  $\text{Max}(X)$  is the least full-category maximal projection dominating X. (Ibid.: 601)

→すなわち Kishimoto(2001)の分析は M 統御分析である。



(Ibid.: 602)



- (19) a. [TP 太郎が [vP 花子を t<sub>i</sub>] 殴った]  
 b. [[ $\emptyset$  太郎が 花子を 殴った]]<sup>3</sup>

→問題となっている NPI を含む文の構造とその表示は以下のように考えられる。

- (20) a. [TP 太郎が[vP 何を買いもし] なかった]  
 b. [TP 太郎が[vP どこへ行きもし] なかった]  
 c. \* [誰を [太郎が [vP <誰を> 殴りもし] なかった]]

- (21) a. [[CP  $\emptyset$  太郎が何を買いもしなかった]]  
 b. [[CP  $\emptyset$  太郎がどこへ行きもしなかった]]  
 c. \* [[誰を] [[太郎が殴りもしなかった]]]<sup>4</sup>

- ・文法的なものは不定語と「も」と否定要素が同一の I 句に入っている。また非文法的なものは不定語が別の I 句に含まれている。

→(20)と(21)の観察から暫時的に以下に一般化を提案する。

- (22) *Licensing Condition on NPIs (First version)*  
 不定語、「も」そして否定要素が同一の I 句に含まれる時、  
 不定語と「も」は NPI として解釈される。

- ・この一般化を想定することで以下のような状況を紐解くことができる。

- (23) a. [TP 誰にその古代文字が読めもしなかった]  
 b. [TP 誰に花子の気持ちがわかりもしなかった]

- ・与格主語は Kishimoto(2012)や Ura (1999)において spec,TP に位置すると考えられている。I 句は CP に対応し、TP 内の要素はその I 句に含まれるので、問題なくその一般化に従う。

- (24) a. [[誰にその古代文字が読めもしなかった]]  
 b. [[誰に花子の気持ちがわかりもしなかった]]

- ・したがって、(24)の表示は(22)の一般化に従う。よって不定語は NPI として認可され、それらの文は文法的と判断される。
- ・(22)の一般化はまた次のような埋め込み節を持つ文をも説明することができる。

- (25) 太郎は [CP 広が何を食べたとも] 思わなかった。

- ・括弧で表示された部分は節であり、節は I 句に対応するので、次のような表示が考えられ得る。

- (26) [[太郎は 広が何を食べたとも] [[思わなかった]]

- ・この表示は(22)の一般化に従わない、よって不定語は NPI として認可されない。しかし、An(2007b)によると動詞に隣接している節は随意的に I 句を形成すると述べている。よって、(26)とは異なる選択肢を取った場合、以下の表示を得る。

- (27) [[太郎は 広が何を食べたとも 思わなかった]]

→この表示は(22)の一般化に従うので、不定語は NPI として認可される。

<sup>3</sup> 便宜的に CP に要素がない場合は  $\emptyset$  を用いて示す。もちろん、これは音韻部門では存在し得ない要素である。

<sup>4</sup> (1)に示されているように移動した要素なので独立した I 句を形成する。

- ・次の例は(25)と同様に埋め込み節を持つ文であるが、不定語が NPI として認可されない。

(28)        ?? 花子は [ 太郎が何を買わなかったとも ] 思った。

→(25)と(28)の唯一の違いは、否定要素の位置である。(25)では主節の位置に、(28)では埋め込み節に現れている。

- ・2 節で確認したように、NPI として振舞うものは否定の作用域の中にある。

→(28)では「何を」は否定の作用域の中に入っているが、「も」は入っていない。

- ・「も」もまた NPI を形成するための要素であるので、否定の要素に C 統御されなければならない。

→これを踏まえて(22)の一般化を(29)として再定義する。

(29)        *Licensing Condition on NPIs (Final version)*  
 否定要素が「も」を C 統御し、かつそれらの要素と不定語が同一の I 句に含まれる場合、不定語は NPI として認可される。

- ・Saito (2017)によると不定語は Op 素性を持っており、その value は語彙的に指定されていない。「も」や「か」の不変変化詞を probe して、それらの不変変化詞が持っている素性を得る。

→したがって、結果として不定語も「も」と同じ素性を共有する。

(30)        否定要素による「も」の C 統御 → 否定要素による不定語の C 統御

(31) a.        [太郎は [ 広が何を食べたとも ] 思わなかった]  
 b.        ?? [花子は [ 太郎が何を買わなかったとも ] 思った]

- ・(31a)は否定の要素が「も」を C 統御しており、それらの要素と不定語が同一の I 句に含まれる。(31b)は否定要素が「も」を C 統御していない。

→従って、(31a)において不定語は NPI として認可され、(31b)はされないということになる。

- ・(29)の一般化はこれまでこの章で見てきた全ての例を捉えることができる。しかしながら、主格主語の例は問題であるように思える。

(32)        \*誰が笑いもしなかった。

- ・主格主語も与格主語も同一の統語的ポジションを占めるのであれば、与格主語だけではなく主格主語もまた認可されるべきである。

## 4.2 主格で標示される不定語主語

(33) a.        \* [TP 誰が [<sub>VP</sub> 花子を殴りもし] なかった]  
 b.        \* [[<sub>CP</sub> ∅ 誰が花子を殴りもしなかった]]

### 4.2.1 二種類の主格主語の解釈

- ・主格主語
  - Exhaustive listing reading... 多かれ少なかれ永続性を示すものが述語の時
  - Neutral description... 存在動詞、動作動詞などの述語の時

- (34) ジョンが学生です。  
 (私たちが話しているすべての人々の中で)ジョンが(そしてジョンだけが)  
 学生です。 (Kuno 1975: 51)

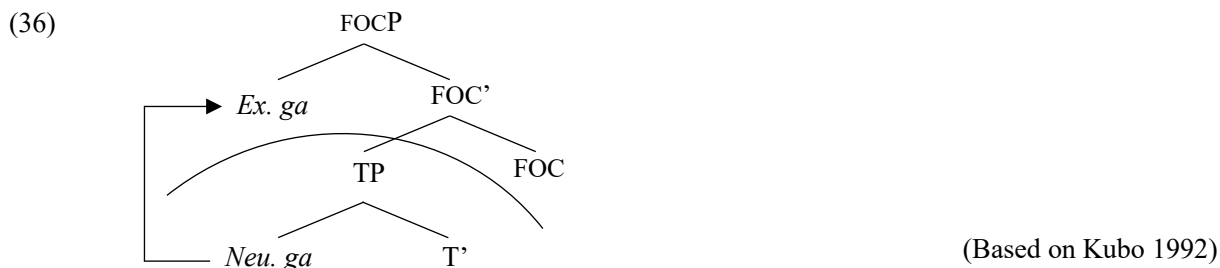
・ (34)において個体レベル述語が使用されている為、主語は Exhaustive として解釈される。

- (35) a. ジョンが来た (neutral description)  
           ‘John came’  
       b. ジョンが来た (exhaustive listing)  
           ‘It was John who came.’

・ (35b)において主語に強勢が落ちることにより、Exhaustive の解釈に強制する。  
 ・ Heycock (1994)は Exhaustive の解釈は焦点(focus)と結びついていることを示している。

→従って、Exhaustive の主格主語は FOCF の指定部に位置すると考えられる。

・ 一方で Neutral description は焦点にも特別な意味解釈にも結びつかない。従ってそのポジションは一般的に想定される主格主語の位置である spec,TP と考えられる(Kishimoto 2001, Mihara & Hiraiwa 2006)。



・ An (2007b)によると焦点の要素は独立した I 句を形成すると考えている。従って、FOCF の指定部に位置する要素は独立した I 句を形成すると想定する。

- (37) [FOCF ジョンが<sub>j</sub> [TP *t<sub>j</sub>* 学生です ]]  
 a. [[ジョンが] [学生です]]  
 b. ~~[[ジョンが学生です]]~~  
 (38) [[ジョンが来た]]  
 a. [[ジョンが] [来た]]  
 b. [[ジョンが 来た]]

・ ここで再び不定語が主格で標示される例を取り扱う。

- (39) a. \* 誰が東京に行きもしなかった。  
       b. \* [[誰が] [東京に行きもしなかった]]  
       c. [[誰が東京に行きもしなかった]]

・ Kubo(1992)によると強勢など韻律的な要因に関わらず、主語が Exhaustive として解釈される例を挙げている。

- (40) 花子が北海道に行きさえした。 (Kubo 1992:37)

・ (39a)と(40)は述語の構成物において類似している。仮に *V(動作動詞)-FOCF-sur(u)*の連鎖が主語を Exhaustive に強制するのであれば(39a)の表示は(39b)ということになる。

→(39a)のような主語が Exhaustive として解釈されるという事実は以下の例からも示される。

- (41) A: 太郎が東京に行きもした。  
B: # 次郎も東京に行きもした／行った。

→A の主語が Exhaustive として解釈されるので、「太郎以外の人もまた東京に行く」という内容である B を発話すると意味において矛盾が生じる。

→従って、(39a)の文の I 句の表示は(39b)ということになる。そしてその表示は(29)の条件を満たさないので事実通り NPI として認可されない。

## 6.0 結論

・本発表では An (2007a,b)の I 句分析を採用することで日本語の NPI として解釈される不定語の認可を説明してきた。I 句は節(CP)に対応するので CP 内に不定語、「も」、そして否定の要素があれば音韻部門で同一の I 句に含まれるため一般化に従い、NPI として不定語が認可される。しかし、それらの要素が独立した I 句に含まれる場合は、条件に従わないため、NPI として認可されないと説明した。またその条件だけでは実際には捉えられない例も存在し、より包括的な説明を行うためには統語分析において重要である C 統御の概念を考慮に入れる必要があることも示した。以上から日本語の NPI の分析には音韻的な要請と統語的な要請、つまり統語と音のインターフェイスの観点から捉えることが必要であると言える。

・本研究では、不定語が与格主語、主格主語であり、「も」が動詞句に付加している例を扱った。前者は、NPI として認可されるにも関わらず、後者は認可されない。これらの差は、I 句の形成方法に関係する。与格主語の場合はすべて TP 内に含まれるため、単一の I 句に必要な要素がすべて含まれる。一方、主格主語の場合は、主語の解釈が Exhaustive に強制され、その要素は焦点と密接に関わっているために独立した I 句を形成し、その結果、条件に従わないためだと主張した。これらの分析は日本語の NPI の分析に I 句が重要な役割を果たすことを裏付ける。

## 【参考文献】

- An, D. H. (2007a). Clauses in Noncanonical Positions at the Syntax-Phonology Interface. In *Syntax*, 10, 38-79. / An, D. H. (2007b). *Syntax at the PF interface: Prosodic mapping, linear order, and deletion*. PhD dissertation, University of Connecticut, Storrs. / Aoyagi, H. & Ishii, T. (1994). On NPI licensing in Japanese. In *Japanese/Korean Linguistics*, 4, 295-311. / Heycock, C. (1994). Focus projection in Japanese. In *Proceedings North East Linguistic Society*, 23, 157-171, GLSA, University of Massachusetts at Amherst. / Hiraiwa, K. (2005). Indeterminate-agreement: Some consequences for the Case system. In *Minimalist approaches to clause structure*, 93-128. Cambridge, Mass, MITWPL. / Kishimoto, H. (2001). Binding of indeterminate pronouns and clause structure in Japanese. In *Linguistic inquiry*, 32, 597-633. / Kishimoto, H. (2010). Hiteijiidoo to Hitei no Sayooiki. In *Hitei to Gengoriron*. Tokyo, Kaitakusya. / Kishimoto, H. (2012). Subject honorification and the position of subjects in Japanese. In *Journal of East Asian Linguistics*, 21, 1-41. / Kishimoto, H. (2015). *Bunpoo gensyoo kara toraeru nihongo*. Tokyo, Kaitakusya. / Kuno, S. (1975). *The structure of the Japanese language*, Cambridge, Mass, MIT press. / Kuroda, S. Y. (1965). *Generative grammatical studies in the Japanese language* PhD dissertation, Mass, MIT. / Mihara, K. & Hiraiwa, K. (2006). *Shin Nihongo no Toogo koozo*. Tokyo, Syoohakusya. / Ono, H. (2008) Indeterminate pronouns and Licensing in Phonology. In *Hiroshima Daigaku Nihongo kyooiku gakka kiyoo*, 18, 97-111. / Saito, M. (2012). Sentence types and the Japanese right periphery. In *Discourse and grammar*, 112, 147-176. Berlin, de Gruyter. / Saito, M. (2017). Japanese wh-phrases as operators with unspecified quantificational force. In *Language and Linguistics*, 18, 1-25. / Selkirk, E. (2009a). On clause and intonational phrase in Japanese: the syntactic grounding of prosodic constituent structure. In *Gengo Kenkyu*, 35-73. / Takahashi, D. (2002). Determiner raising and scope shift. In *Linguistic Inquiry*, 33, 575-615. / Ura, H. (1999). Checking theory and dative subject constructions in Japanese and Korean. In *Journal of East Asian Linguistics*, 8, 223-254.